HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Philosophical Intuitions in the Free Will Debate : Unraveling Boundaries and Insights [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	稲荷森, 輝一
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16480号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94896
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kiichi_Inarimori_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　稲荷森輝一

審査委員　主査　准教授　宮　園　健　吾
副査　教　授　田　口　茂
副査　教　授　竹　澤　正　哲
副査　准教授　太　田　紘　史（筑波大学）

学位論文題名
Philosophical Intuitions in the Free Will Debate: Unraveling Boundaries and Insights
（　自由意志論争における哲学的直観：境界の探究と新たな視座　）

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、哲学方法論（philosophical methodology）分野の中心的な話題の一つである「哲学における直観の役割」について、自由意志の哲学における哲学的直観をケーススタディとして、既存の先行研究を超えた新たな視座を提供しようと試みている。

従来の（分析）哲学研究においては、哲学者が自身の直観（とりわけ、ゲティア例やトロッコ問題などの仮説的な事例に関する直観）に依拠しつつ哲学的な議論を組み立てるということが盛んに行われてきた。他方、近年では、哲学研究に実験心理学的なアプローチを導入するいわゆる実験哲学（experimental philosophy）の手法を用いて一般人の直観を調査し、それを哲学者の直観と比較検討することが行われるようになっている。他方で、LLM（大規模言語モデル）の登場にともない、AI もまた仮説的な事例に対して応答することができるようになり、これは人間の直観と類比的なものと考えることもできる。この動向を受けて、本論文は、仮に哲学の議論において直観が果たすべき役割があるとして、誰（哲学者、一般人、あるいは AI）の直観が用いられるべきであり、また、その直観はどのように用いられるべきか、という問いを設定し、自由意志と決定論との両立可能性をケーススタディとして、この問いに対する一つの回答を提案するものである。

１章～３章では一般人の直観が論じられる。１章～３章で中心的に扱われるのは、一般人が決定論的なシナリオを十分に理解できない、という所謂「理解エラー（comprehension error)」の問題である。３章で詳述されている新しい実験研究の結果、決定論を正しく理解した人々は両立論的直観を示す傾向性があること、理解エラーの因果的影響は限定的である一方で、処罰欲求と責任帰属直観との間に強い相関関係があることなどが示された。

４章では哲学者の直観が検討される。一般人が決定論的シナリオを十分に理解できないという理解エラーの問題がある一方で、専門的な哲学者はそれを十分に理解できる。このことから、哲学者は一般人にはない一種の特殊技能があり、それが決定論的シナリオの正しい理解、及び決定論的シナリオについての直観の産出に寄与していることが論じられる。

５章では AI の「直観」が考察される。理解エラーやバイアスなどの問題を抱える一般人の直観に対して、AI の「直観」はどの程度優れて（あるいは、劣って）いるのかという問いに対して、実験的な手法を用いてアプローチしている。その結果、現行の LLM は理解エラーやバイアスの問題を完全に克服しているわけではないこと、他方で、技術の発展によってこれらの問題が解決される可能性が十分あることが示される。

６章では、１～５章の議論を受けて、一般人の直観、哲学者の直観、AI の直観、それぞれの意義と役割について総合的な考察がなされる。

本論文第２章の内容は査読付国際学術誌 *Frontiers in Psychology* に、第３章の内容は査読付

国際学術誌 *Cognitive Science* に、第４章の内容は査読付国際学術誌 *Revista De Humanidades De Valparaíso* 及び査読付国内学術誌『哲学』（日本哲学会）に、それぞれ採録されている。第５章の内容は査読付国際学会で発表済みである。これらの事実は、学位申請者の研究が関連国際学会において一定の評価を得ていることを示している。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会では、本論文の独創性と新規性について高い評価がなされた。一方で、（１）従来の哲学者が実際に議論の中で重視している種類の直観と、この研究で調査されている種類の直観にずれがあることから、後者の種類の直観を実験的に調べることが果たして哲学的な意義を持ちうるのかどうかについての疑念、（２）３章での実験研究では、被験者のサンプル数がかなり大きいことから、実際には小さな効果しか持たないような事象が大きな現象として見えてしまう、といった統計的にミスリーティングな結果をうむリスクがありうるという指摘、（３）一般人が決定論を理解できないということは、決定論という考え方が極めて不自然であり、よって、決定論と自由意志との両立可能性という哲学的な問題設定自体がそもそも不自然かつ不適切ということを示しているのではないかという疑念などが提示された。口頭試問においては、これらの指摘のいずれに対しても、学位申請者から応答及び補足説明があった。その他の疑問点についても、本論文の学術論文としての価値を本質的に損なうものではないと、本委員会では判断した。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。